

Title	近代日本における日蓮仏教の宗教思想的再解釈：田中智学と本多日生の「日蓮主義」を中心として
Author(s)	Burenina, Yulia
Citation	
Issue Date	
Text Version	ETD
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/26226">https://doi.org/10.18910/26226</a>
DOI	10.18910/26226
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

## 論文内容の要旨

〔 題 名 〕 近代日本における日蓮仏教の宗教思想的再解釈  
一 田中智学と本多日生の「日蓮主義」を中心として一

学位申請者 Burenina Yulia

本論文は、近代日本における日蓮仏教の再解釈、「日蓮主義」の宗教思想的側面を考察したものである。1900年代初頭に田中智学（1861-1939）によって創唱されたこの言葉は、日蓮宗門内で活躍していた本多日生（1867-1931）によっても用いられるようになり、両者の著作と活動を通して、宗教者をはじめ学者、教育者、政治家、軍人などの当時の知識人の間でこの新造語が広まっていくこととなる。

本論文では、まず、序章において智学と日生の生涯を紹介し、第一章では先行研究の特徴と問題点を明らかにする。総じて言えば、これまでの「日蓮主義」に関する研究は、両者の国家主義的思考が問題視されてきたことは確かであるが、内容的に精査すると、第一期（1960-70年代）、第二期（1980-90年代）、第三期（2000年から現在に至るまでの時期）という三期に分けることができる。第一期の特徴は、両者の日蓮仏教解釈における宗教と国家の関係に焦点が当てられ、彼らを「日蓮ファシスト」として位置付ける論調が主流になっていることである。第二期の研究では、第一期の「日蓮主義」の否定的評価が見直されてくるとはいえ、やはり、その関心は、宗教と国家の関係に集中する。そして、第三期には、第一、二期の論調を引き継ぐ研究だけではなく、新たな視点での研究、すなわち、「日蓮主義」の社会思想的側面に着目する、宗教社会学的な研究などがでてくる。ただし、その意義は大きいとしても、智学、日生の両者は日蓮仏教を再解釈し、「日蓮主義」という「宗教」を唱え、その「宗教」をもとにした人間生活のあり方の見直しをめざしたのであり、その宗教思想的側面を看過してはならない。そこで、本論では原点に立ち戻って、宗教としての「日蓮主義」について論及していくことにしたのである。

第二章では、智学と日生の宗教思想における原点となる本尊論をとりあげ、両者の考え方の異同に注目した。智学の本尊論の特徴としては、佐渡始頭の曼荼羅という明確なイメージやその曼荼羅によって象徴されている「人法一如」（仏と法の一体化、宇宙真理と信者の一体化）が挙げられる。一方、日生の特徴としては、宗教学的な方法論と釈尊中心の宗教観がある。智学は伝統的な宗学用語を使いながら、本尊の定義や説明を行ない、末法思想を根底にしなが末法における唯一の救済者として日蓮を捉え、その絶対性を強調するが、日生は末法にこだわらず、時間と空間を貫く救済者である釈尊を重視し、日蓮を相対的に捉える。また、智学はすべての基準を日蓮の教義に見出し、本仏の遣使である日蓮を絶対的に信仰せよと教えるが、日生は、日蓮を尊敬しながらも、釈尊の人格性、普遍性と実在性に力点を置き、仏宝である釈尊に帰依せよと主張するのである。

第三章では、両者における近代の「科学的」方法論である進化論と宗教学の受容に注目し、彼らがこの「科学的」方法論によって、「日蓮主義」の近代性、優位性、科学性を主張しようとしたことを明らかにした。智学は末法を進化的に解釈し、「末法三期」という進歩の原理に基づく歴史観を示し、「日蓮主義」を進化論的で、一直線の時間の流れの頂点として位置付けることで、新しい時代に現われた考え方の正当性や必要性を証明しようとする。

一方、日生はハルトマンの『宗教哲学』とティーレの進化論的な宗教類型論に基づき、日蓮仏教の優位性を明かにしようとする。日生はハルトマンの「絶対者」についての考え方、宗教意識と文明とのレベル的な対応性、仏教とキリスト教の比較、さらにはこの二つの宗教の短所を超える宗教構想に刺激を受け、また、ティーレの宗教類型論を参考に、本尊を頂点とする宗教の類型を完成しようとし、「統一神教」の理想を説くのである。このように「科学的」方法論である「進化論」あるいは「宗教学」に基づき、智学と日生はそれぞれに日蓮仏教の再解釈を行い、「科学的」根拠を得た日蓮仏教は、近代に適合した「宗教」である「日蓮主義」として明確化されていくのである。

第四章では、智学と日生の宗教思想の構造や特徴を考察するなかで、両者における日蓮仏教の再解釈の背景、すなわち、ユニテリアニズムの伝播、新仏教運動、大乘非仏説論争、神秘主義の広がりに着目し、ユニテリアニズムや新仏教にみられるような、理性的、合理的な宗教観を肯定的に捉えたのは、日蓮仏教に宗教学の方法論を積極的に取り入れようとした日生であり、一方、智学は、その理性主義等がもたらす弱点に注目し、「日蓮主義」における教権性、絶対性を強調したことを指摘した。また、智学は、仏教を末法以前の「普通仏教」と末法以後の「特別仏教」に分け、大乘非仏説に対抗するために仏教の教理そのものをインドで生まれた釈尊ではなく、日本で出現した日蓮に直結させようとするが、一方、日生は、仏教教理を仏説と非仏説、正法・像法向きと末法向き、あるいは、インド仏教と日本仏教に分けることより、時間的にも、空間的にも、統一的な仏を教義的に構築しようとしていることを明らかにした。さらに、両者は、仏教をキリスト教に対抗できる宗教とするには、明確な信仰意識が必要であり、そして、その意識の中心に実在の人格をおかなければならないと考えたが、智学の場合はそれが日蓮の人格であり、日生の場合、釈尊の人格であったことを論じた。両者が目指したものは、そういった信仰によって、近代における諸問題、すなわち理性と感情、神秘と合理、歴史と真理といった矛盾を超克し、それぞれを調和させることにあったが、智学の「日蓮主義」は日蓮をすべての原理、プリンシプルとして位置付ける、日蓮信奉であったのに対し、日生の「日蓮主義」とは、日蓮が主義としたものを信仰の中心に置く釈尊信奉であったのである。

終章では、智学と日生の異なった「日蓮主義」の特徴がどのように継承され、展開していくのか、この点に注目して、とくに、智学の「日蓮主義」における神秘主義的傾向と宮沢賢治へのその影響、そして日生の「日蓮主義」における理性重視の姿勢や仏教統一論と妹尾義郎へのその影響を取り上げた。その中で、智学と日生にとっては「宗教」という言葉が、信仰と繋がるものだけでなく、社会・国家・文明の「指導原理」としても認識されていたことが後代に「国家主義者」、「ファシスト」と評された一因となっていたことも指摘した。

## 論文審査の結果の要旨及び担当者

氏 名 ( Burenina Yulia )	
	(職) 氏 名
論文審査担当者	主 査 教授 加藤 均
	副 査 教授 嶋本 隆光
	副 査 准教授 柴田 芳成
	副 査 准教授 佐野 方郁
	副 査 准教授 岩井 茂樹

## 論文審査の結果の要旨

提出された論文「近代日本における日蓮仏教の宗教思想的再解釈—田中智学と本多日生の「日蓮主義」を中心として」は、明治期の日本において、仏教を近代的な思想体系として再構築しようとする動きの中であらわれてくる、田中智学（1861-1939）と本多日生（1867-1931）の「日蓮主義」を取り上げ、それを宗教思想的側面から考察しようとするものである。

序章で、両者の生涯に言及した後、第一章「田中智学と本多日生の『日蓮主義』をめぐる先行研究」では、近年になって、「日蓮主義」の社会運動的な側面が注目されるようになってきたとはいえ、総じて戦後の研究では、「日蓮主義」を国家主義的イデオロギーとして否定的に捉えてきたため、本来行われるべき、宗教思想的な観点からの研究が不十分であったことを指摘する。

そのうえで、第二章「近代日蓮仏教の宗教思想的原点—本尊論と『日蓮主義』—」では、「日蓮主義」を宗教として方向づけることになる両者の本尊論の分析に入り、ともに、一神教のキリスト教に対抗する形で本尊の普遍性を説きつつも、智学は、佐渡始頭の曼荼羅を本尊とし「人法一如」の考え方をもとに日蓮を末法における唯一の救済者として位置づけていたのに対して、日生は、日蓮の存在を相対化し、法華経に説かれる久遠の本仏である釈尊を救済者として捉えていたことを論証する。

続く、第三章「近代日蓮仏教における西洋思潮の受容—『日蓮主義』の『科学的』方法論—」では、近代的な宗教として「科学的」な装いをもった「日蓮主義」を構築するために、智学は、進化論に基づいた「末法三期」という進歩史観を、そして、日生は、宗教学的方法論を用いて、統一神教（法華経の教義、「日蓮主義」）を頂点とする新たな宗教類型論を創り出したと指摘する。

第四章「近代日蓮仏教の宗教思想的構造—『宗教』としての『日蓮主義』—」では、当時の宗教界での動き、すなわち、ユニテリアニズムの伝播、新仏教運動、大乘非仏説論争、神秘主義の広がりを取り上げながら、①智学は、ユニテリアニズムや新仏教運動の理性主義を批判するなかで、神秘主義へ傾倒し「日蓮主義」の教権性、絶対性を強調するようになっていくのに対して、逆に日生は、理性主義に肯定的な立場をとったこと、②大乘非仏説論への対抗手段としても、智学は、日蓮を教義の基軸にする必要があったが、日生は、時間・空間に左右されない統一的な仏を構想することでその問題の解消を図っていること、そして③キリスト教における人格神と同様な存在を日蓮仏教においても創出しようとして信仰の基盤に智学は日蓮の人格を、日生は釈尊の人格を置こうとしたことを、文献的に裏打ちされた形で明らかにする。

終章「智学と日生の『日蓮主義』の特徴とその継承・発展」では、両者の異なった思考の継承とその展開を見るために、智学の「日蓮主義」における神秘主義的傾向と宮沢賢治への影響、そして日生の「日蓮主義」における理性重視の姿勢と妹尾義郎への影響に言及しつつ、両者にとっては「宗教」という言葉が、信仰と繋がるものだけでなく、社会・国家・文明の「指導原理」としても認識されていたことが後代に「国家主義者」と評された一因となっていたのではないかと推論する。そして、最後に、智学は日蓮をすべてのものの原理、プリンシプルと捉え、その「日蓮主義」の本質は日蓮信奉（Nichiren=Principle）にあったのに対し、日生の「日蓮主義」は、日蓮が主義としたものを信仰の中心に置く釈尊信奉（the Principles of Nichiren）であったと結論づけている。

明治の近代化・西洋化に対して仏教はどのように思想的に反応したのか、これを解明するのは、日本仏教思想史研究においてはかなり重要な課題であるが、特に「日蓮主義」は戦後、国体論とのつながりが問題視されたため、この点での研究はかなり遅れていると言わざるを得ない。その証拠に「日蓮主義」を政治的イデオロギーと捉える従来の

研究の多くで、両者の思想は一括りに取り扱われてきたのである。そういった中、本論文では、体系的教義書を残さなかったためにこれまで研究がほとんどおこなわれてこなかった本多日生の「日蓮主義」について、雑誌掲載論文等の一次文献を渉猟することでその一端を明らかにしただけでなく、智学の三千頁を超える組織教学の書『日蓮主義教学大観』を丁寧に解説することによって、両者の宗教思想の差異を描き出すことにも成功しており、今後の「日蓮主義」研究においては、本論文の存在を無視することはできず、その学術的な意味は計り知れない。なお、本論文の骨子は、米国で開催された近代日本仏教に関する国際学会ですでに発表しており、その際、本多日生の思想的再評価につながるものとして、かなりの反響を呼んだことを付言しておきたい。

以上、審査したところにより、本審査委員会は、全員一致で本論文が博士の学位（日本語・日本文化）にふさわしいものであるという結論に至った。